“I. P. ベルキン” とは誰か？
── プーシキンの散文ポエティックス確立にまつわる謎 ──

丸　山　美知代

・・・すぐれたパロディストはあらゆるスタイルを自在に駆使する。
── プーシキンの手紙より

イワン・ペトロヴィッチ(ベルキン)が言うように，それら(五つの話)は大部分，本当の話です。彼がさまざまな人から聞いたものです。
── プーシキン『故イワン・ペトロヴィッチ・ベルキンの話』編者前書きより

よかれあしかれ，最後に物を言うのは注釈者なのだ。
── ナボコフ『青白い炎』キンボートの前書きより

十九世紀ロシア・ロマン派詩人としてつとに有名であったアレクサンドル・プーシキン(Alexander Selgeyevich Pushkin 1799-1837)は迫りくる結婚への不安感から逃れるようにして1830年９月にボルディノの所有地に旅立った。コレラの発生で何ヵ月も閉じこめられることになったステップのなかで，彼は驚異的な文学的豊穣の時を体験する。そして友人のP.A.プレトニョフ宛ての手紙に，「バラチンスキーを身も世もなく大笑いさせるであろう５つの散文作品」[1]を書いた旨の報告をしている。

これが1831年に匿名の短篇小説集として出た『故イワン・ペトロヴィッチ・ベルキンの話』(*The Tales of the Late Ivan Petrovich Belkin*)である。彼の小説家としてのデビュー作を読んだ批評家たちは「そっけない，味気なさ」に驚愕と嫌悪感を隠さなかった。[2] 無味乾燥な生活を送る普通の人間が主人公としてとりあげられていること，めずらしくも読者を教化するといった意図が見えないこと，文章があまりに簡潔で飾り気のないことが，カラムジンの『憐れなリザ』[3]に見るようなステロタイプ化したセンチメンタルな物語に馴れ親しんできた人々に容易に受け入れられなかったのも当然といえば当然である。プーシキンの散文作品の先駆性が見直されるようになるのは，後につづくゴーゴリやドストエフスキーが「小さな人間」を作品の中心に据え，

簡潔なスタイルで書くことに成功してからである。

プーシキンをこよなく愛し，膨大な『ユージン・オネーギン』を捧げたウラジミール・ナボコフは，『ベルキンの話』を「実験的なショート・ストーリーで，普遍的な芸術的価値をもつロシア語で書かれた最初のもの」と評した。[4] ただ私の見るかぎり，当時の読者の理解を超えるような実験性という表現ではまだ物足りないほどの新しさ，さらに言えば一見多様なストーリーとスタイルを貫いて流れる精神に，新しいロシア散文ポエティックス確立へのプーシキンの並々ならぬ意欲と自負心が感じられるのである。新しい短篇小説集としての工夫は，その構成ひとつをとっても明らかである。それは違ったタイプの短篇作品を繋がりのあるように見せようとするご都合主義から発したものと混同されがちで，事実，短篇集に編者の序文や著者の前書きを付して，それらがあたかも芸術上の構造的な必然性と統一性を備えているかのように見せようとする作家がいる。ただ作家のどんな奇矯さも許すほど読者が成熟してしまった現代ならいざ知らず，十九世紀の作家にとって，未熟な読者の興味を喚起して物語世界にひきこむ手立てとして，こういう配慮は欠くことができなかった。「これは間違いなく人から聞いた話ですよ」とか「これは私が偶然，手に入れた手記に書かれていたことですよ」と念を押したうえで，すべてが作家の企みである事実を隠蔽する形式的手順を踏まねばならなかった。それがコンヴェンションとして定着したのがスコットの物語集であるが，これに多少とも西欧・ロシアの作家たちは影響を受けた。[5] また検閲が厳しいロシアの作家にとっては，作品との距離を保つことを常に心がける必要があった。特に1825年のデカブリストの反乱に巻き込まれるのを危ういところで逃れたとはいえ，プーシキンにはニコライ一世の検閲の目が光っていた。検閲をパスするために無邪気な物語集の印象をあたえようとしたプーシキンは，5つの話を匿名で一般の検閲に回している。そして首尾よく出版の許可をえている。したがって前書きのなかに著者としてベルキンが登場するのは1834年版からなのである。[6] ただのエピソード集にすぎなかったものが，この特徴のない地主紳士の登場によって突如として謎めいた様相を帯びはじめる。しかもベルキンはすでにこの世の人ではなく，（あきらかにプーシキンとわかる）A.P.という人物が偶然に遺稿の編集を誰かに依頼されて，ご覧のような形になったというわけである。[7] これでは作家が舞台前面から姿を消す効果はあまりないどころか，その存在を強調することになる。さらにある批評家は「ベルキン。いたるところにベルキン，ベルキン。読者が待っているのはベルキンではなく物語なのだ」と不満を洩らし，慧眼にもベルキンの存在にこそ作品の真の意味があると見る者もいた。[8] 前書きは最初から全体の構想のなかに入っていたのだ。

9)

プーシキンが検閲の網をくぐりぬけてまで世に出そうとした前書きとは一体どんなものか？5つの話を書いたとされるベルキンとは誰なのか？　本稿は伝統的な短篇小説集としか見えない『ベルキンの話』に秘められた小説家プーシキンの深い意図を明らかにするためのものである。

第六の話：奇妙な前書き

ヤン・M・マイヤーは編者A.P.の前書きに注目して，これを「六つ目の話」つまり五つの話を集めたベルキンに関する重要な話のひとつに数えている。[10] A.P.の説明によると，彼自身は故ベルキンと何の関係もないので，短篇集としての体裁を整えるべくベルキンの伝記的事実を集めようとした。あまり人づきあいのよくなかったベルキンについては親戚の者さえ十分な情報を提供できなかったが，やっとベルキンの父親の代からの友人で，かなり年上の同じ階級の男が手紙を寄せてくれる。編者は「思いやりに溢れた気高い態度と，心打つ友情のしるしとして，そして行き届いた伝記的記述として」(144)，「変更や説明を加えずに」(140)手紙の言葉をそのまま写したと述べている。[11] 今だに論争の種になっている手紙の日付の不可解さや，『ゴリューヒノ村史』(*The History of the Village of Goryukhino*) でベルキン自身が記している事実と手紙の書き手の情報とが齟齬することはひとまず措くとして，ここには編者が評するような「思いやり」も「行き届いた」事実への言及も見られないのである。[12] 手紙の主は友人ベルキンの地主としての無能ぶりを嘆き，勤勉に働いた父親から受け継いだ領地の管理に関心を示さず，使用人に体よく騙されていたことに苛立っている。特にお話を聞かせてくれる召使を重用し言うがままになっていたと憤慨するのである。実務にしか重きをおかない手紙氏は，虚構としての「お話」というもの，それを後生大事にする作家にたいして軽蔑と嫌悪感を露わにしている。その証拠に「作家というものを尊敬し，敬愛してはおりますが」(144)という但し書きを添えて，自分の手紙を掲載するのは結構だが，名前だけは明かさないでくれと編者に頼んでいる。彼にとってのフィクションとは，将来の紛争を避ける目的で人名や地名を変えることを意味し，何かの都合で実名が使われた場合，それは「ひとえに（作家の）想像力の欠如」によるのだ。それ以外は欺瞞でさえあるのだ。確かに手紙氏は作家ベルキンの生と死を，彼なりの「率直な善意」をこめて語っているといえよう。だがどうあがいてみても読者は，彼の報告からイワン・ペトロヴィッチの子供っぽい無能さと，それに

似合った特徴のない風貌をぼんやりと思い浮かべるのが精一杯なのである。

> イワン・ペトロヴィッチは中背，目はグレイ，髪はブロンド，真直ぐな鼻。色白で顔はほっそりしていました。(144)

アンドレイ・コジャックは，前書きをプーシキンから同時代人に宛てた（プーシキンにとって）危険極まりない進歩的自由思想の表明だと考えている。[13] デカブリストの反乱に関係したとして多くの将校が逮捕・追放されたキシニョフ連隊のイメージがプーシキンにあって，ベルキンもそれに関係してイエーガー連隊を辞めさせられたのだという。ベルキンの父親と同世代の手紙氏にとって，それはツァーの裏切り者として家名を汚すことであり，ベルキンへの思いやりからというより，亡き父親への友情から，彼はベルキンの伝記的事実の肝腎なところを隠そうとしたのだという。編者A.P.が「思いやり，心打つ友情」と評したのはこの点についてなのだ。前書きを暗号のように読み解いていくコジャックの手際は見事であるが，そういう過去をもつベルキンが書いたとされる5つの話の分析になるととたんに筆勢が鈍ってしまうのが致命的な欠陥である。5つの話からプーシキンの秘められた政治的・社会的なメッセージだけを読み取るのは無理なようだ。

ではこのような手紙をなぜ編者A.P.が前書きに加えたのか？　A.P.自身の証言によれば，まず他に伝手がなかったこと，それから「わが国の文学を愛する方々の当然の好奇心を満足させたかったから」(140)とある。これが，いかに情けないものであれ歴史をもったベルキンなる人物によって集められ，記された本物の話であることを，誰よりも「ほんとうの」話にしか興味を示さない（手紙氏のような）ロシアの一般読者に信じさせようと（あるいは，そのふりを）したのだ。[14] しかも他方で些細な思い違いや大きな矛盾という空洞を穿っておいて，そういう「ふりをしている」とほのめかしているのだ。ほのめかしの方法だが，これがなかなかふるっている。たとえばA.P.が手紙に手を加えないと言ったその舌の根も乾かぬうちに，ふたつの註を付していることだ。註2はベルキンの原稿の書き込みから，それぞれの話の語り手の「身分や階級と名前のイニシャル」がわかったという報告だが[15]，註1は「余分な逸話だと判断したので」手紙の記述の一部分を削除したというものだ。ただし「読者のみなさんに請け合っておくが，イワン・ペトロヴィッチ・ベルキンの記憶を汚すようなものは一切含まれていなかった」(143)と言っている。どんなエピソードを手紙氏が披露しているにしろ，ベルキンの女性問題に関わることらしいのは文面から明らか

である。もちろん編者の言うとおり何でもない可能性もあるが，読者としては編者の処置に胡散臭いものを感じざるをえない。そういう疑念や不可解さにとらわれる読者心理を期待して，この前書きは書かれている。つまり謙虚さを旨とするA.P.が，実際には「最後に物を言って」いるのである。

ベルキンの5つの話

さて現在，私たちの前にある『ベルキンの話』は「射撃」"The Shot"，「吹雪」"The Snowstorm"，「葬儀屋」"The Undertaker"，「駅長」"The Postmaster"，「召使になった貴婦人」"Mistress into Maid" という順に並んでいる。ところが前書きの註2によると「駅長」「射撃」「葬儀屋」「吹雪」「召使になった貴婦人」というのがベルキンの手による配置であったようだ。プーシキンとA.P.の意図はともに最初に体制批判的ともとれる言辞が飛び出す「駅長」を目立たないように後に回すことであったと思われるが，同時に幻想的な「葬儀屋」を軸にして，きわめて近代的・心理的な「射撃」と「駅長」の後に，楽しい恋物語「吹雪」「召使になった貴婦人」がつづくよう配慮されていることも見逃せない。しかも5つが見事に違った声で語られるだけでなく，語り手の物語世界への関わり方も多様で，A.P.によって各挿話に付されたエピグラフが単なるコンヴェンションとしてのエピグラフではないと思えるふしがある。[16] これらの点に注目して5つの話を読んでみよう。

第一話の「射撃」ではI.L.P.中尉がシルヴィオという射撃の名手の嫉妬と復讐心について語る。名誉と勇気がすべての価値にまさると信じる若いロマンティストの語り手は，陰を帯びた年上のシルヴィオに，決闘によって人を殺してしまった記憶に苦しんでいる神秘的なヒーロー像を投影する。エピグラフにも決闘という語が踊る。これでシルヴィオがヒーローらしくふるまえば，これはもうロシアの読者が歓迎するロマンスである。ところが話は語り手にとっても読者にとっても思いがけない方向に進んでしまう。シルヴィオは新参の将校に侮辱されても決闘に応じようとしない臆病者で，語り手はすっかり失望するが，なぜ命を惜しむかという理由をシルヴィオから聞かされる。シルヴィオは以前，あまりに恵まれた若い将校への嫉妬心から決闘を挑んだが，決闘の場でも自分の生死に無頓着な様子で帽子からサクランボを取っては口に運ぶ伯爵を殺しても，復讐を遂げたことにはならないと思う。[17] そして伯爵が結婚した今こそ，その時だといって去っていく。彼の射撃の腕はこの時のために磨かれてい

たのだ。何年かが過ぎ，（ベルキンに酷似した状況で）自分の所有地に帰った語り手は退屈な生活を余儀なくされる。[18] 新婚の隣人が帰郷していると聞いて訪問するが，これがシルヴィオの相手の伯爵夫妻だったのである。結局シルヴィオは伯爵に困惑と恐怖心を見てとると，壁にかかった風景画に復讐の弾丸を撃ち込んで去っていったという。[19] 本来，彼の復讐心は，ロマンスにあるような個人的恥辱からではなく，不公平な運命への怒りから発しているのだが，こうして伯爵夫人の眼前で夫を辱めたことで自分の名誉も汚してしまった。[20] ここで語り手が文学作品からえたロマンティシズムの理想は同じ文学作品によって完全に打ち壊されたのである。しかもその決闘によってプーシキン自身がまもなく命を落とすことになるとは何とも皮肉なことである。[21]

I.L.P.中尉が全知の語り方ではなく，自分の見たこと聞いたことだけを頼りに話を進めているために，読者には彼自身の変化までが察知できる。復讐者というロマンティシズムの仮面を被りとおしたシルヴィオに対して，語り手はそれに憧れる無邪気な若者から現実を見つめる大人へと変化している。最後にシルヴィオがバイロンのように，トルコからの独立をかけて絶望的な闘いをするギリシャ軍に加わって戦死したことが，ほんのつけ足しとでもいうように冷ややかに報告される。[22] これが語り手の言葉にしろ，ベルキンの手になるにしろ，血沸き肉躍る決闘場面を期待させた「射撃」は心理劇に変貌し，思いがけぬアンチクライマックスを迎える英雄話，決闘物のパロディに仕上がっている。

「吹雪」は前書きによると，女性が語る話である。金持ちの跡取り娘と貧しい将校が恋に落ちて，お定まりの告白，手紙の交換とつづき，ついに絶望的な状況に苛立って駈け落ちを決行する。ところが「吹雪」が青年の行く手を阻み，彼が教会にたどりついた時には，恋人も手助けした人たちも去っていた。娘の両親がふたりの結婚を許す気になった時，彼は恋人との訣別を決意し，後にナポレオン戦争で戦死してしまう。人々の話によると，娘は亡き恋人の思い出を胸に独身のまま生涯を終えるつもりらしい。無理解な親，ロマンティックなフランス小説を読んで育った若者たち，手紙を交わすたびに高まっていく恋心，駈け落ち前夜の娘の不安感，悪夢のような吹雪。絵に描いたような悲劇的ロマンスのプロットが展開する。ここで気になるのは語り手の女性（あるいはベルキン）の恋人たちへの皮肉な態度である。物語を効果的に語ることに意識を集中していて，まるで映画のカメラマンのように，ここぞというところで場面の切り替えを行なう。たとえばマーシャが橇に乗って家を出たところで，「若

いご婦人を運命の手に，そしてテリョーシュカと御者の腕に委ねたところで，われらが恋する若者の方に話をもどそう」(164)というふうに。この手で読者の笑いを引き出しさえする。何もかも不首尾に終わった後，娘の家はさぞや大騒動になっているだろうと誰もが想像する。「ここでネナラドヴォのお大尽の家にもどってみよう。そして何が起こっているか見ようではないか」という言葉に誘われて，次の行に移ると，なんと「何も」(168)の一言があるだけで，マーシャと両親の常に変わらぬ様が描写される。皮肉で可笑しいのは，おしゃべりで知られる召使たちまでが沈黙に徹し，この事件の秘密を半ダース以上の加担者が守ったということだ。それに親たちの結婚を認める理屈というのがふるっていて，「女は結局運命が定めた男と結ばれるもので，貧しさは罪ではないし，第一，富と結婚するわけではない。」(169)

この後，マーシャの前に（噂では）不幸な恋ゆえに「興味深い」憂いを湛えた好青年ブルミンが登場する。悲劇的ロマンスの常で，ふたりは惹かれあうが，それぞれに理由があって躊躇している。ところがその障害ゆえにふたりは結ばれるのだ。あの吹雪の夜，ブルミンの悪戯心からふたりは間違って結婚してしまった。雪嵐がウラジミールのかわりにブルミンをマーシャの結婚相手として送ったのだ。

この最後のひねりが，薬を飲む夜のジュリエットのようなマーシャの恐怖もジュコーフスキーの韻文によるロマンティックなエピグラフの「吹雪」の描写も，人々がマーシャに託した貞節の美徳も，すべて吹き飛ばしてしまう。死んだ恋人の亡霊が花嫁をあの世に連れ去るゴシック趣味の大団円の可能性も笑いとばされてしまう。[29] 設定の点ではワシントン・アーヴィングの「幽霊花婿」(1820)に似ているが，プーシキンのはもっとドライな田園喜劇に仕上がっていて，パロディへの指向が目立つ。[30] だいたいもっとも無邪気にロマンスを追い求めたウラジミールだけがなぜ死なねばならないのか。冷酷にも答えは無邪気にロマンティックだったからである。一方，本を手に白いドレスを着て柳の木の下に座るマーシャは「本物の小説のヒロイン」(173)のように見えるが，彼女は悲劇的ロマンスのヒロインの殻を破って，真実を心に秘めること，沈黙によって人を欺くこと，ブルミンの告白を引き出す手管まで身につけている。

ところで女性の語り手の言葉とはどうしても考えられない部分がある。

・・・忘れられぬ時代！ 栄光と熱狂の時代！ "父なる祖国"という言葉に，ロシアの人々の心はどれほど高鳴ったことか！

再会の甘美な涙！ われらがこぞって祖国への誇りとツァーへの愛をもちえた時！ 彼に

とっても，なんという瞬間だったことか！

その頃の女たち，ロシアの女たちは特別だった。普段の冷やかさは影をひそめていた。征服者を歓迎して「ウラー」と絶叫する時の激しさたるやうっとりさせるものがあった。

“そして帽子を空に投げあげた！”

そんなロシアの女たちを見て，これこそ何ものにも代えがたい報酬だと言わない将校などいただろうか？（171）

1810年代，皇帝アレクサンドル一世のもとに国家としての威容を誇ったロシアにノスタルジーを感じ，兵士たちを熱狂的に歓迎する女たちを好意をもって見る目は，あきらかに男性ベルキンの，あるいはプーシキンのものである。とすれば，この話自体がベルキンによる虚構である可能性もでてくる。

ゴーゴリを連想させる３つ目の作品では，アドリアン・プロホロフという葬儀屋が引っ越し先の隣人に招かれたパーティの席で，自分の職業を馬鹿にされたと勘違いして，そういうことなら自分の家には「死人」を招待しようと宣言する。そして約束どおりさまざまな腐敗の兆候をみせた死人たちが，葬ってくれたアドリアンのもとへ駆けつけてくる。

死人を食事に招待する設定，メイソンへの言及など，あきらかにモーツァルトと「ドン・ジョヴァンニ」を意識している。[25] ドン・ジョヴァンニもロマンティックな伝説のヒーローであるが，プーシキンはあえて年老いた葬儀屋にその役を振り，やってくる死人たちも主人公を地獄へともなうためではなく，約束と違う棺桶を売りつけた葬儀屋に愚痴を言いにやってきたのだ。生きている人間は滑稽だが，死骸になっても人間はけちで可笑しい。これはアドリアンから悪夢について聞かされたらしい店員の話をもとにしているのだが，シェイクスピアやスコットの墓掘りをひきあいに出すだけでなく，描写の方法についての「今時の小説の習慣」にまで触れているのはベルキンだ。たとえばプロホロフ一家が招待を受けて着飾って出かける時，「ここで立ち止まって，アドリアン・プロホロフの着ているロシアのカフタンとか，アクリーナとダーリャのユーロッパ風の身繕いについて描写するつもりはない。この点で現今の小説家のやり方から逸れてしまうことになるが。ただふたりの娘が・・・黄色い帽子をかぶり，赤い靴を履いていたと言うくらいは無駄なことでもあるまい。」（180） これは「正確さと簡潔」を散文の美徳としたプーシキンの（ベルキンを通じた）言葉と考えてまちがいない。[26] そしてデルジャーヴィンのメメント・モリを意識したエピグラ

フに対して，アドリアンの魔法の箱のような棺桶は「何が飛び出してくるかお楽しみ」とでもいうように，よりどりみどりなのである。

> (アドリアンの家の)門にはたいまつを逆さにもったぽちゃぽちゃ太ったキューピッドが，次のような広告文と一緒に掲げてあった。「簡素な棺桶に色塗り棺桶，売ります。誂えます。貸し棺桶もあります。古い棺桶の修理もします。」(178)

このエピソードは一般に言われるような滑稽な息抜きではなくて，プーシキンがパロディにして葬ろうとした旧態依然たる物語作法を入れる棺桶なのかもしれない。[27] 彼が試みているのは「古い文学の修理」なのだから。

「駅長」は，旅をすることの多かった役人の雄弁な「駅長」論で幕が開く。エピグラフでヴャゼムスキーが身分の低い暴君と呼んだ「駅長」を，その暴君も上位の者の横暴を堪え忍んでいるのだといって弁護するが，話はサムソン・ヴィリンという「駅長」とその可愛い娘ドゥーニャの運命へと移っていく。娘は通りかかった若い将校と駈け落ちをしてしまうが，父親は娘が不孝を悔いてもどってくると信じつづける。壁にかかった聖書の逸話のように，「放蕩」娘の帰還を迎える日が来ると信じる。ではドゥーニャは男に騙され棄てられる無垢な悲劇のヒロインの運命をたどったのか？いや，彼女はミンスキーに愛されて幸せだったのである。サムソンもそれを認めながら，自分の決めた役柄から抜け出すことができず，酒に溺れついに命を落とす。

ここでも悔い改めをテーマにした道徳的逸話と見えたプロットが，娘が幸せであるより墓に入っていてくれたほうがましだとさえ思う父親のエゴの物語にいつのまにか姿を変えている。語り手は断片的に父娘の様子をたずねるのだが，心理的にはセンチメンタルなサムソンに深く関わっていて，こういう結末になったことに哀れを感じている。そして最後にドゥーニャが父の墓を訪ねたことを道案内の少年から聞いて，独善的な感慨にふけるのである。ここでのプーシキンの標的は男たちが「憐れなドゥーニャ」とたびたび呼ぶことから分かるように，もうひとりの「憐れなリザ」の物語，「堕落した女」の物語，それに道徳話である。他方ベルキンは，ミンスキーに渡された金を怒りにまかせて捨てたものの，思い直して拾いにもどるサムソンの哀れで滑稽な様子を淡々と語っている。

「召使になった貴婦人」は「吹雪」と同じ女性が語る牧歌的恋物語で，ここでも恋

は成就する。イギリスかぶれのリザの父親とロシア一偏倒のアレクセイの父親は何かというと反目しあう間柄である。アレクセイは憂欝なロマンティストを気取っているが，実際は陽気な性格のよい若者で，彼に興味をもったリザはアクリーナという召使に扮して近づき，ふたりは予定どおり恋に落ちる。青年は娘に書くことを教え，手紙が往復し，彼が身分の違いという障害をものともせず，親がすすめる本物のリザとの結婚を断ってアクリーナに求婚しようと決心したとき，アクリーナがリザの演じる召使だったということが分かり，めでたし，めでたし。敵対する名家の跡取り息子と娘，これは『ロミオとジュリエット』をはじめ悲劇的ロマンスの常套的セッテイングであるが，この親たちがどことなく間がぬけていて，一方が乗った馬のせいで怪我をしたのをきっかけに，両者はまたたく間に和解するだけでなく，子供たちを結婚させようというまでになる。一方，子供たちは（召使も含めて）親の反目など気にせずに行動している。リザの忠実な召使のナスチャは，両家の使用人が自由に交流することについてこう言っている。

> ご主人たちが私たちに何の関係があるというのです？　それに，私はお父さまにではなく，あなたにお仕えしているのです。あなたはベレストフの若様と喧嘩なんかしていらっしゃらない。喧嘩がそんなに楽しいのなら，ご老体たちにやらせておけばいいのですわ。(206)

悲劇が起きそうな切迫した雰囲気などどこにもない。何より楽しいのはリザがシェイクスピア喜劇のヒロインのように変装して，恋人の本心を確かめるのに成功することだ。そして田舎育ちで『パミラ』を一年に二回も読む家庭教師につき添われ，本でしか社会を知らないリザが本にあるような恋をし，自分で役を演じているうちに自分の本質が本にあるようなロマンティックな悲劇に向かないと確認することだ。

ここでも語り手の声はベルキンのものである。田舎育ちの女性と都会育ちの女性を比較検討して，田舎育ちの女性にこそ「個性」があると結論するとき，こういう女性論が「吹雪」でも展開されたことに私たちは気づく。しかも「葬儀屋」でのように，恋人たちのやりとりの詳細を「読者の大部分は私が興味をもつことには関心を示されないだろうと分かっているので，それは省くことにしよう。ただこれだけは言っておきたい・・・・」(215)と，読者を意識した語り手の声になっている。リザという名前から誰もが連想するカラムジンのリザは，哀れにも恋人に棄てられて池に身を投げる。[28] 森のなかでの逢引き，手紙の交換という手続きは似ているのだが，プーシキン

のリザは変幻自在でイギリス風の何ともロマンティックでないベッツイという呼び名が象徴するように，憐れなリザに徹することはできないのだ。

「君は美しい。ドゥーシェンカ，何を着ようと」というエピグラフについては，これだけにパロディの意図は認められないという批評家がいる。[29] だが「何を着ようと美しい」というのもロマンティックな恋人の口からしか出てこない台詞ではないか。「召使」のなかでリザがリザを演じたとき，アレクセイがそのけばけばしい悪趣味に愕然とするところから，本物の色白の貴婦人リザも色黒の召使アクリーナも美しいが，もうひとりのリザは決して美しくはないと言うべきだろう。ゲームを続けるために，アレクセイに嫌われようとして装ったリザの姿は，ロマンティックな恋人の口癖に冷水を浴びせるものである。その意味で「召使」は，エピグラフの喚起する期待を物語が裏切る前四作と本質的には変わりがない。

ベルキンとA.P.とプーシキン

なぜベルキンなのか？ ここで改めてプーシキンがベルキンを介して物語を発表した狙いを考えてみたい。まず何よりもプーシキンがベルキンという架空の素人作家に興味をもっていたことだ。『ゴリューヒノ村史』でベルキンが展開する自伝および自分が生まれた小さな村の歴史から，彼が愚かで開明的，頑固で善良，慎ましく野心的で，いかにユニークな愛すべき人物であったかがうかがえる。あらゆるジャンルの文学形式を試してみて（『ベルキンの話』もその成果のひとつなのだが）自分にもっとも適した表現形式を模索する日曜作家の滑稽な真剣さに，プーシキン自身，プロの作家として苦笑しながらもおおいに関心をもっていて，壮大なベルキン物を構想していたのかもしれない。[30] 残念ながら未完の『ゴリューヒノ村史』で彼の足跡は途絶えるのだが。

次に考えられるのは，前述のようにA.P.と話のあいだにベルキンという曖昧な人物を置くことで，真の作家と作品の繋がりをぼやけさせる狙いがあったことだ。それがひとつには政治的配慮によることはすでに述べた。

ベルキンが書いたとされる5つの話は，道徳，教訓，メロドラマ，センチメンタリズムで読者を喜ばせるように作られ，ステロタイプとして確立していた物語にひねりを加えてパロディ化することで，人生の断片にほのみえる皮肉や可笑しさを，大いなる企みを水面下に隠した氷山のような簡潔な表現によって生のまま読者に伝えようとしている。これがプーシキン独自の散文の原理に基づくことはいうまでもない。出版

当時の批評に見るように，これは現代の私たちの想像を超えた文学上の革命的実験であった。とすれば政治的配慮とは別に，職業上の配慮も働いたと思われる。この型破りな5つの話は，A.P.でもプーシキンでもなく故ベルキンが書いたもので，ベルキンも「さまざまな人から聞いた」もので・・・というふうに5つの話はどんどん本当の作家の手から遠ざかっていくような「錯覚」を生むのである。しかも「さまざまな人から聞いた」とすれば，小説の慣習から判断して，手紙氏の言うとおり「ほんとうの話」ということになる。プーシキンは形式のうえで当時の小説作法を踏襲して，すべてが作家の想像力の産物であることをあからさまにしないようにしているのだ。しかし一方で，すでに見たように，話のなかからベルキンの声が聞こえてきたり，厳密な聞き書きなのか意図的な粉飾なのか判然としないこともある。彼は5つの話を書く経緯を「人から聞いた話を選んで，生き生きした語り口と，時には私の想像力という絵筆で事実を飾ってみたりした」と語り，そういう訓練によって「自分のスタイルを作り上げ，自分を正確に楽しく思うがままに表現するすべを学んだ」[31]と言っている。極端な物言いをすれば，すべてが作家ベルキンによる虚構である可能性も否めない。一応ベルキンの証言どおりの聞き書きだとしても，「こういう作り話めいたつまらぬ逸話」[32]という発言で，彼自身が話の真実性に疑いを抱いていることがわかる。だいたい『ゴリューヒノ村史』のパンタグリュエルめいた法外なエピソードの数々を読むかぎり，嘘つきの小説家に見切りをつけて歴史家になったはずのベルキンの面目躍如とはとてもいえないのである。[33]

十八世紀の風刺喜劇から引かれた前書きのエピグラフは，“history”の洒落になっていて，愚かなミトロファンのことを大人たちが皮肉に「歴史（history）に強いといいのだが」と言うと，意味を取り違えた母親が「そのとおりですわ。あの子は小さい頃からお話(history)が大好きでした」と答え，けちで馬鹿という名の叔父のスコチニンが「ミトロファンはわたしに似たのだ」とつけ加える。歴史よりお話が好きな「愚かな（ふりをした)」，「けちな＝言葉を惜しむ＝簡潔を旨とする」ベルキンがエピグラフのなかから目くばせでもしているようだ。[34] ベルキンは4月1日生まれの根っからの「嘘つき」なのだから。[35]

しかしながら，架空の作家の陰に身を置いたプーシキンは前書きにA.P.と思わせぶりにサインすることを忘れなかった。それは第一にプーシキンの名前で新作を売るためで，「僕の名前をスミルディンに囁いておいてくれ。やつが読者に僕の名を囁いてくれるように」[36]と手紙にも記しているとおりである。ベルキンのマスクをつける決心をしたプーシキンは，それでもこの魅力的で野心的で危険な作品の実作者である

ことを誇らしげにほのめかさずにはいられなかった。前書きのわざとらしい空洞や歪みは読者の注意をひくための，いわば暗号のようなものなのだ。ここに浮かびあがってくるのは，コンヴェンションとしての短篇小説集の構造をパロディ化して利用しながら，小説が作家から読者へのお説教でもなく，また華やかな言葉で飾られた陳腐なロマンスでもなく，謎を仕掛ける作家とそれを解く読者の生き生きした相互関係で成り立つ事実を，読者の眼前につきつける近代作家プーシキンの心意気だ。そして小説をそういうものとしてとらえる新しい散文作家の余裕と笑いの精神だ。プーシキンの散文ポエティックスはここにきわまったと言えよう。

Notes

1．*The Letters of Alexander Pushkin*, translated by J.Thomas Shaw (University of Wisconsin Press,1967),p.446. 以後，*The Letters* と略。
バラチンスキー (1800-44) はプーシキンのライヴァルで，彼よりもさらにリアリスティックな日常的スタイルで書いた作家。『ベルキンの話』を書くにあたって，プーシキンの念頭にはバラチンスキーの文体があったと思われる。

2．当時のロシアでは，華やかな文体でヨーロッパのゴシック趣味とセンチメンタリズムを模倣することが流行していた。絶対的な権威をもつ批評家であったベリンスキーは「不毛，泥だらけ，冷たい雨もようの秋」のような作品で「芸術作品」とは言えないと評した。トルストイも「丸裸のような」小説と言っている。
Vassarion Belinskii, *Polnoe sobranie sochinenii* (Moscow: Izdatel' stvo Akademii nauk SSSR,1953-59),I,139-40.

3．Nikolay Mikhaylovich Karamzin, *Poor Liza* (1792)
身分の違う青年に誘惑され棄てられて自殺する憐れな乙女のセンチメンタルな物語で，当時大いにもてはやされ，リザが身を投げたとされる池詣でがモスクワっ子の間で流行した。

4．Vladimir Nabokov, *Eugene Onegin* (Princeton University Press,1975), III, p.180.

5．Walter Scott, *The Waverley Novels* (London: John C.Nimmo,1898).
The Tales of My Landlord (London: John C.Nimmo,1819).

6．1831年に匿名で検閲をパスしたので前書きを送るよう出版者はプーシキンに手紙を書

いたが，一向に送られてこなかった。そして1834年，*The Captain's Daughter* や *The Queen of Spades* と一緒にまとめて第二版を出すとき，はじめて前書きが付された。*The Letters*, ibid.参照。

7．下書きによると，原稿を持ち込んだのは前書きにその手紙が掲載されることになるベルキンの友人ということになっているが，後に何らかの理由でそこが曖昧にされている。

8．V.V.Vinogradov, *Stil' Puskina*, M.,1941, p.536.
V.S.Uzin, *Opovestjax Belkina*, (Akvilon,1924), p.6.

9．前書きは1831年夏に執筆されたとみられるが，構想については早くからプレトニョフに話している。

10. Jan M. Meijer, "The Sixth Tale of Belkin," *The Tales of Belkin*, ed. J.van der Eng (The Hague: Mouton,1968), pp.110-34.

11. テキストは Alexander Pushkin, *The Captain's Daughter and Other Stories* (New York: Vintage Russian Library,1936)を使用した。引用ページはこの版による。

12. 1830年11月23日に受け取った編者の手紙に，手紙氏は16日付けの返事を書いていることや，ベルキンが1798年に生まれたといっているが，ベルキン自身は1801年生まれだと『ゴリューヒノ村史』に書いていることなど，ふたりのベルキンが同一人物だとすると，奇妙な矛盾がある。またベルキンの地主としての無能さが強調されるが，彼自身の発言では進歩的で有能な地主であった。
Pushkin, *Goryukhino*, translated by Gillon Aitken and David Budgen (London: Angel Classics,1983).

13. Andrej Kodjak, *Pushkin's I.P. Belkin* (Columbus: Slavic Publishers,Inc.,1979).

14. 1827年のフラグメントでプーシキンは，ベルキンの前身とおぼしい素人作家に「わが国の文学を愛する方々」という言葉で話を始めさせているが，ここにも明らかに風刺の意図がある。

15.『ベルキンの原稿には「誰それから聞いた（次に身分，階級，名前のイニシャル）」というふうに，それぞれの話に書き込みがあった。ここに好奇心の強い研究者のために引用する』として，「駅長」は "Titular Counsellor A.G.N.", 「射撃」は "Lieutenant I.L.P.", 「葬儀屋」は店員の "B.V.", 「吹雪」と「召使になった貴婦人」は "K.I.T.

嬢"と書かれている。I.L.P.はプーシキンがキシニョフで親しかったI.P.Liprandiで，シルヴィオのモデルでもあるとKodjakは考えている。

16. "The Shot"はバラチンスキーとマーリンスキー，"The Snowstorm"はジュコーフスキー，"The Undertaker"はデルジャーヴィン，"The Postmaster"はヴャゼムスキー，"Mistress into Maid"はボグダノヴィッチからの，いずれも当時，愛好された韻文の引用である。決闘の場でサクランボを食べる癖はプーシキンのものであった。

18. 家にある本を読み漁り，召使に「お話」をさせる点など，ゴリューヒノのベルキンに似ている。

19. フッサーのシンボルの帽子とロマンティックなスイスの風景画に弾丸を撃ち込んで，ロマンティシズムを葬り去るジェスチャーである。これはFriedrich Schillerの*Wilhelm Tell*(1804)やVictor Hugoの*Hernani*(1830)のパロディである。

20. Paul Debreczeny, *The Other Pushkin: A Study of Alexander Pushkin's Prose Fiction* (Stanford University, 1983).

21. プーシキンは1831年に結婚したナターリア・ゴンチャロワとフランス人ダンテスとの仲を疑い決闘寸前までいくが，ダンテスがナターリアの姉と結婚してその場はおさまった。しかしふたりは1837年1月ついに決闘におよび，プーシキンは致命傷を負って死ぬ。

22. バイロンの詩人としての才能が早く開花しすぎたこと，ヒーローとして生きようとした点をプーシキンは冷徹に批判している。
The Letters, ibid.,p.161.

23. Walter Scott, *The Bride of Lammermoor*参照。

24. Washington Irving, "The Spectre Bridegroom," *The Sketch Book* (1820). 幽霊と見えた花婿が，実は殺された花婿の友人だったというリアリスティックな解決にいたる点で，アーヴィングはゴシック小説のコンヴェンションを破っている。

25. ボルディノでプーシキンは*Mozart and Sarieli*, *Don Juan*, *The Stone Guest*を書いたと報告している.モーツァルトのフリーメイソンとの関係，ドン・ジュアンが死者の騎士長の石像を夕食に招待するエピソードを利用したと思われる。*The Letters*, ibid.,p.446.

26. 1822年にプーシキンは「単純な簡潔さがまだ我々に馴染んでいない。だから散文にも

枯れ凋んだ花飾りを要求するのだ。...正確さと簡潔さ(precision and conciseness)これこそ散文の二大美徳である」と書き,「小説にはお喋り(chatter)が必要だ。すべてを平たく言うことが」と述べている。Pushkin, "O prosza." *Polnoe sobranie sochinenii* (Moscow-Leningrad,1937-59),vol.XI,p.19. *The Letters*, ibid., p.224.

27. David M.Bethea & Sergei Davydov, "Pushkin's Saturnine Cupid: The Poetics of Parody in *The Tales of Belkin*." *PMLA* 96 (1981), pp.8-21.

28. 註3参照。

29. Bethea & Davydov,ibid., pp.15-16.

30. Alexander Pushkin, *The History of the Village of Goryukhino* (1931)。死後出版されたこの作品は「悲惨」という名のベルキンの生まれ故郷の村の奇想天外な歴史である。これも以前流行したカラムジンの *History of the Russian State* のパロディを狙ったものと言われる.

31. ベルキンは作家になるべく,韻文,叙事詩,警句,短篇小説とあらゆるジャンルを手懸けている。

32. Pushkin, *Goryukhino*, p.149.

33. 奇想天外さにかけてはアーヴィングの *A History of New York* に近いように思われる。

34. D.I.Fonvizin, *Minor* (1788).

35. *Goryukhino* でベルキンは "I was born of upright and honourable parents on April 1st,1801 in the village of Goryukhino..." (143)と自己紹介をしている。

36. *The Letters*, ibid., p.209. スミルディンは出版者の名前。

Works Cited

Belinskii, Vassarion. *Polnoe sobranie sochinenii*. Moscow: Izdatel' stvo Akademii nauk SSSR, 1953-59.

Bethea, David M. & Davydov, Sergei. "Pushkin's Saturnine Cupid: The Poetics of Parody in *The Tales of Belkin*." *PMLA* 96,1981.

Debreczeny, Paul. *The Other Pushkin: A Study of Alexander Pushkin's Prose Fiction*. Stanford: Stanford University Press, 1983.

Irving, Washington. *The Sketch Book of Geoffrey Crayon Gent*. Boston: Twayne Publishers, 1978.

____. *A History of New York From One Beginning of the World to the End of the Dutch Dynasty*. Philadelphia: Lippincott, 1872.

Karamzin, N.M. *Selected Prose of N.M.Karamzin*, translated and with an introduction by Henry M.Nebel Jr. Evanston: Northwestern University Press, 1969.

____. *Memoir on Ancient and Modern Russian*, translated and with analysis by Richard Pipes. Cambridge: Harvard University Press, 1959.

Kodjak, Andrej. *Pushkin's I.P.Belkin*. Columbus: Slavic Publishers, Inc., 1979.

Meijer, Jan M. "The Sixth Tale of Belkin," *The Tales of Belkin*, ed.J. van der Eng. The Hague: Mouton, 1968.

Pushkin, Alexander. *The Captain's Daughter and Other Stories*, translated by T.Keane. New York: Vintage Russian Classics, 1936.

____. *Eugene Onegin*. 4vols.translated by Vladimir Nabokov. New Jersey: Princeton University Press, 1975.

____. *The Tales of Belkin with the History of the Village of Goryukhino*, translated by Gillon Aitken and David Budgen. London: Angel Classics, 1983.

____. *Pushkin on Literature*, translated by Tatiana Wolff. London: Methuen, 1973.

____. *The Letters of Alexander Pushkin*, translated by Thomas Shaw. Madison: University of Wisconsin Press, 1967.

____. *Mozart and Salieri: The Little Tragedies*, translated by Antony Wood. London: Angel Books, 1982.

Scott, Walter. *The Waverley Novels*. London: John C.Nimmo, 1898.

____. *The Tales of My Landlord*. London: John C.Nimmo, 1819.

Vinogradov, V.V. *Stil'Puskina*. M., 1941.

Works Consulted

Bakhtin, Mikhail. *Problems of Dostoevsky's Poetics*. University of Minnesota Press, 1984.

Beckwith, Martha W. *Pushkin: The Man and the Artist*. New York: Paisley Press, 1937.

Clayton, J.D. *Ice and Flame: Alexander Pushkin's Eugene Onegin*. Toronto: University of Toronto Press, 1985.

Jakobson, Roman. *Pushkin and His Sculptural Myth*, ed. John Burdank. Mouton, 1975.

Konick, Willis. "Categorical Dreams and Compliant Reality: The Role of the Narrator in *The Tales of Belkin*," Canadian-American Slavic Studies 11, no. 1 (Spring 1977).

Lezhnev, Abram. *Pushkin's Prose*, translated by Roberta Reeder. Ann Arbor: Ardis,

1983.

Mirsky, D.S. *A History of Russian Literature From Its Beginning to 1990*. New York: Vintage Russian Library, 1953.

Nilsson, Nils Ake. "Brevity in Pushkin's Prose," *Canadian Slavonic Papers*, vol.29, nos.2 & 3. June-September, 1987.

Schmid, Wolf. "Prose and Poetry in *Povesti Belkina*," Canadian Slavonic Papers, vol.29, nos. 2 & 3. June-September, 1987.

Simmons, Ernest J. *Pushkin*. Cambridge: Harvard University Press, 1937.

Tertz, Abram. *Strolls with Pushkin*. New Haven: Yale University Press, 1993.

Troyat, Henri. *Pushkin*, translated from French by Nancy Amphoux. New York: Minerva Press, 1975.

Uzin, V.S. *O povestjax Belkina*. Akvilon, 1924.